



Title	土族語の正書法
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 4, p. 49-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

土 族 語 の 正 書 法

角 道 正 佳

The Orthography of the Monguor Language
(Mongghul ugonu jub juuridal)

KAKUDO Masayoshi

0. はじめに

中華人民共和国青海省及び甘粛省で話されている土族語（モンゴル語）は、1979年以来正書法を確立しようという動きがあり⁽¹⁾、そのおおよその内容は1982年に出版された『土漢対照詞彙』(Mongghol Qidar Harilqilegu Ugosge)及び1988年に出版された『土漢詞典』(Mongghul Qidar Merlong)から窺われる。前者は約4千4百語、後者は1万4千余りの見出し語が掲載されている。後者のほうが倍以上の見出し語を掲載してはいるものの、前者の語彙がすべて後者に載っているわけではなく、前者に豊富に掲載されている漢語系語彙は、後者では載っていないことが多い。序文には千語余りを掲載できなかったと記されているが、この中にも漢語系語彙が多く含まれているのであろう。両者はほぼ同じ方針で土族語を表記してはいるが、バリエーションの採り上げ方、母音の認定の仕方、アポストロフィーの使用法等に微妙な差異が見られる。例えば辞書の名前に見られる「土族」を表す語の綴りが、前者では Mongghol、後者では Mongghul というように違っている。

1985年出版の『土族語詞彙』(Mongyor kelen ü üges)の見出し語数が6千余りであるから、現在の時点で見出し語数が最も多いのは『土漢詞典』である。したがって土族語の正書法を検討する上で、他の資料が得られない現状では、この辞書が最も重要であると思われる。正書法を知るためには、単に自立語の語幹の綴り字がわかるだけでは不十分であって、付属語、付属形式、分かち書きの仕方、略字の書き方等の様々なことがわからなければ十分ではない。残念ながら、こういった情報は例文の全くない『土漢対照詞彙』では殆ど得られず、『土漢詞典』でも序文や例文を手掛かりに、これらの情報のほんの一部が得られるに過ぎない。見出語彙数1万4千余りとはいえ、例えば Schröder が記録している土族語の民話、神話、諺等のテキストを『土漢詞典』に基づいて、正書法で綴ってみようとする、たちまち綴り方がわからない語がたくさん現れる。

Schröder が記録したのは『土漢詞典』が基にしている東溝 (Xjir ghul、以下地名は『土漢詞典』の綴りで表記する) 方言ではなく、Halqi ghul 方言と Narin ghul 方言の間の方言であるが、方言の違いのために辞書に語彙が載っていないのではなく、絶対的に辞書の語彙が不足しているためである。

1. 土族語の方言

土族語は大きく互助方言と民和方言とに分かれるが、人口約11万人の互助方言に対して、人口約3万人の民和方言のほうは正書法では考慮されていない。両方言の話者のコミュニケーションには相当の支障があるようである(魯長寿(1986:60))。両方言には次のような音韻史上極めて重要な違いがある。

互助方言	民和方言
1. 長母音と短母音の区別がある	長母音と短母音の区別がなく短母音だけがある
2. *q が x に対応する	*q が q に対応する
3. *p が f に対応する	*p が x に対応する
4. 音節末で l と r の区別がある (ただしNarin ghul方言は除く)	音節末で l と r の区別が失われ r になっている
5. 音節末の m が保存されている	音節末の m が n 又はŋになっている

この他にも、語頭子音の連続が互助方言のほうが多いとか、歯茎硬口蓋音と反り舌音との対応の仕方が異なるとか⁽²⁾、『土族語簡誌』によればさらに、民和方言の各種の母音が互助方言ではəに中和しているとかいった違いがある。もっともこの中和現象は互助方言のうちの東溝方言以外では事情は異なる⁽³⁾。語彙、語法上の違いもちろん存在する。

互助方言の内部にも de Smedt & Mostaert やТодаева、『土族簡史』(1982:2)によると、哈拉直溝 (Halqi ghul)、紅崖子溝 (夫藍那拉) (Fulaan nara)、那龍溝 (那仁敦勒) (Narin ghul)、大通方言などの下位方言がある。魯長寿 (1986:60) では互助方言の下位方言として東溝、大通、三十の名を挙げている。東溝方言というのが土族語の標準語として選ばれた方言であるが、この方言は de Smedt & Mostaert、Тодаева、『土族簡史』に記されている下位方言とどのような関係にあるのかはっきりしない。de Smedt & Mostaert、Тодаеваに現れる下位方言の名称は川の名前に基づいているのに対し、魯長寿のものは地域名に基づいているようである。これらの下位方言の全ての資料があるわけではなく、多少とも豊富な資料があるのは、(1) de Smedt & Mostaert が Alima hanxar で記した Narin ghul 方言、(2) Schröder が Huniq pang⁽⁴⁾で記した Halqi ghul と Narin ghul の中間の方言、(3) Тодаева の記した Halqi ghul 方言、(4) 中国側の資料に見られる東溝方言である。

正書法を確立する上で先ず問題になるのは音素数であるが、各資料に現れる母音の数に微妙な

違いがある。(1)では非常に多くの母音が認定されているが、Hattori (1973)、斎藤 (1983) ではそれぞれ次のように音素分析している。なお Hattori(1973)の分析は de Smedt et Mostaert (1933) (DMF) に基づいているのに対し、斎藤 (1983) の分析は Mostaert et de Smedt (1929-30) に基づいている。

Hattori (1973)							斎藤 (1983)						
短母音				長母音			短母音			長母音			
i	u	u		ii	üu	uu uu	i	ɨ	u	i:	ɨ:	u:	
e	ə	o		ee		oo	ɛ	ə	o	e:		o:	
æ	a			aa			ä	a		ɛ:		a:	

いずれも短母音が8つ認定されている。一方(3)では短母音、長母音それぞれ5つずつしか認定されていない。(4)の場合、『土族語簡誌』では短母音は i, ə, ɐ, e, a, o, u の7つ、長母音は ii, ee, aa, oo, uu の5つの母音が認定されているが⁽⁵⁾、『土族語詞彙』では音素としては短母音6、長母音5が認定されている。席元麟 (1986) では i, ə, a, o, u の5母音、及びこれに breve の付いた5母音の計10母音が認定されている⁽⁶⁾。breve が付いていないほうは長母音または短母音に対応し、付いているほうが短母音に対応する。(2)については、いったいいくつの母音を認定すべきか十分な音素分析ができない。というのはこの資料では極めて多くのバリエーションが現れるため、どの母音が最小対立を成し、どの母音が自由交替を成しているのかの決定が困難であるためである。この資料の性格については角道 (1988a, 1988b, 1990) を参照されたい。

しかし問題は短母音、長母音の数以外に二重母音の認定の仕方にもある。(1)で多くの母音が認定されているのは、例えば次のように(1)(即ちDMF)の長母音のあるものは他の資料では二重母音に対応するからである。Hattori ではb類は長母音、e類は二重母音に分析している。(3)の資料ではa, b類が同じ母音、d, e類が同じ母音である。(4)の資料ではb, e類は二重母音になっている。

	(1)		(3)		(4)	(4)	(4)
	DMF	Hattori	斎 藤	Тодаева	『土族語簡誌』	『土族語詞彙』	『土漢対照詞彙』 『土漢詞典』
a 類	ū	uu	ɨ:	ȳ	əuu	u:	uu
b 類	ū	uu	u:	ȳ	auu	au	au
c 類	ō, u ō	oo, woo	o:	ō	oo	o:	oo
d 類	ē, i ē	ee, jee	e:	ē, i ē	ee	e:	ee
e 類	ē	ai	ɛ:	ē	aii	ai	ai
f 類	ū	uu	u:	ȳ	uu	u:	uu

Hattoriのu(斎藤のu)はDMFのqに隣接するとき現れるu(ɯ)の異音であると思われるので、実際には短母音は7つであると思われる。iとəの関係は、後述するように、東溝方言では『土族語簡誌』や『土族語詞彙』に示されるとおり事実上対立しない。残りはHattoriのæ(斎藤のä)であるが、東溝方言では他の母音、主としてaの異音と考えられている。『土族語簡誌』にのみa類とf類との区別がある。a類にはsəuu「わき」、ciɾəuu「土」、səuul「尾」、kəuu「子供」等、f類にはuur「空気」、bundə「小麦」、guu「雌馬」、fuula-「支える」、təuudzaŋ「区長」等があるが両者の違いははっきりしない。

子音については、(1)～(4)の間で、母音ほど大きな違いはない。もっとも大きな違いは歯音と歯茎硬口蓋音とを別の音素と認めるかどうかである。HattoriとSchröderとが認めない立場、それ以外は認める立場である。歯茎硬口蓋音の直後のi, ü以外の母音の前に渡り音iを認めると、HattoriとSchröderの立場になる。斎藤(1983注10)では構造の原則によりかなった分析をするために歯音と歯茎硬口蓋音とを別の音素としている。

もう一点は借用語に現れるzを独立した音素と認めるかどうかという点である。多くは認めているが、(3)では認められていない。これは、収録語彙に該当する音がなかったためであろう。(4)のうち『土族語簡誌』と『土族語詞彙』では認められているが、細かい点では違いがある。『土族語簡誌』のzaʒi「利害」、zənmin「人民」等の漢語系語彙に見られる/z/は、『土族語詞彙』ではra:rə, rən minのように[r]で表記されている。しかし「岳父」を表す「丈人」に由来する語は『土族語詞彙』でもdzəŋ zɪnというように[z]で記されている。『土漢対照詞彙』には前者2語はraari, rinminのようにrで記してある。

2. 東溝音の検討

土族語の正書法を表記している『土漢対照詞彙』(Mongghol Qidar Harilqilegu Ugosge)及び『土漢詞典』(Monggul Qidar Merlong)は東溝(Xjir ghul)方言に基づいているので、この方言を記述した『土族語簡誌』や『土族語詞彙』(Mongʁor kelen ü üges)の記述と比べてみるのが最も重要である。母音音素の認定のしかたは、上記の4つの資料でも微妙な差異があるので、先ずこの点を検討してみることにする。長母音、短母音、重母音、単母音をすべて含めていくつの母音があるかということも重要であるが、主として短母音がいくつ必要であるかという点に注目することにする。

『土族語簡誌』の/i/, /ə/, /u/について

『土族語簡誌』には短母音としてi, e, ə, ɐ, a, o, uの7母音が認定されている。このうちɐは漢語からの借用語にのみ現れるので別にすると、6つの母音が区別されていることになる。土族語の正書法で用いられている短母音はi, e, a, o, uの5つしかないので、

『土族語簡誌』では1つ多い。この違いはどこから来るのであろうか。ここで問題になるのは i ,
ə , u がどのように対立しているのかという点である。これらの音素の異音とその現れる条件は
次のようになっている。○は例があることを表す。

		齒 音	反り舌音	齒 茎 硬口蓋音	硬口蓋音	唇 音	語 頭	そ の 他
		dz__	dz__	dz__	j__	b__	#__	
		ts__	ts__	tɕ__		p__		
		s__	s__	ɕ__		m__		
						f__		
						v__		
音 素	異 音							
／ i ／	[l]	漢語のみ						
	[ɭ]		○					
	[i]			語中	語中	漢語のみ	○	
／ ə ／	[ə~ɪ]	固有語のみ						
	[ɻ]			語末	語末			○
／ u ／	[y]			○	○			
	[ɻ]					語中		
	[u]					語末		

[ɻ] は唇音 b , p , m , f , v の直後にある場合は音素／ u ／に割り当てられ、ds , ts , s ,
dz , tɕ , ɕ , j 以外の子音の直後にある場合は音素／ ə ／に割り当てられている。

dz , ts , s の直後では／ i ／と／ ə ／とが対立するように見えるが、前者は漢語からの借用語に
主として現れ、後者は本来の土族語の語彙に現れるようである。また、dz , tɕ , ɕ , j の直後でも
／ i ／と／ ə ／とが対立するように見えるが、前者は語中、後者は語末に現れる。このことは
『土族語簡誌』 p.12に説明があり、labdzəla-「葉が出る」、ajəmel「恐がり」、ɕəm「行く」
は labdzila- , ajimel , ɕim と発音するという例が載っている。したがって／ i ／と／ ə ／は
事実上対立するとは言い難い。

[thymɻr]「鉄」は『土族語簡誌』では／ tɕmur ／と音素分析されているが、『土漢対照詞
彙』では timur、『土漢詞典』では tumur というように表記に違いが見られるのは、[ɻ]
を／ i ／、／ u ／のどちらの音素に割り当てるのかの違いが現れているにすぎない。『土漢対照
詞彙』と『土漢詞典』で「英雄」がそれぞれ baatir , baatur というように違っているのも同
じ理由による。

『土族語詞彙』の異音の条件

『土族語詞彙』の編写説明の第11項 (p. 8 及び p.16) に次のような表が載っている。

a :	a	(æ)	(ɤ)			
e :	e	(ɜ)				
i :	i	(ə)	(ɪː)	(ɪ)	(ɪː)	(ɪ)
o :	o	(uː)	(ʊ)	(ɔː)	(ɔ)	
u :	u	(y)	(ø)			

この表と第13項 (pp.10-12及びpp.17-18) の説明を総合すると、長短を別にすると6つの母音が弁別されていて、øを除いて同じ行にあるのはその異音である。『土族語簡誌』では[ɤ]は/ə/又は/u/の異音であったが、『土族語詞彙』では/a/の異音ということになる。もっともこの母音はbɤijæm「白洋」、kɤudzau「マスク」、kɤdam「狼」の3語にしか現れず、しかも「狼」にはkadamというバリエーションもあることを考えると、さほど重要な異音ではない。『土漢対照詞彙』では「白洋」は記載されていないが、「マスク」はkiuzau、「狼」はkidan~kadamと表記してあるから、[ɤ]の一部は/i/の異音と解釈していることになる。[ɪ], [ɪː]を/i/に帰属させるのは『土族語簡誌』と同じである。『土族語簡誌』で/ə/に対応する母音[ə]を/i/に帰属させているため母音が少ない。『土族語詞彙』には『土族語簡誌』にはないような異音が認められているけれども、その現れる条件に関する記述はない。以下検討を試みる。

/a/の異音

[æ]が現れるのはdz, tc, c, jの直後に限られる。第一音節の場合だけを調べてみると、次のように分布している。数字は該当する例の数、稀は例が少なく、○は例があることを表す。

	__b	__m	__v	__s	__n	__l	__r	__s	__c	__dz	__ŋ	__g	__#
dz a					1						○	○	
dz æ	○	○	1	○	○	1	1	○	○	○		○	○
tc a	1						2				○	1	
tc æ	○			○	○	○	○			○	1		
c a					2		2				○	○	
c æ		○	○		○	○	○				稀		
j a		3										○	
j æ		○	○	○	○		○					2	

第一音節では__ŋ, gの位置で[a]、それ以外の位置で[æ]が現れるのが最も普通である。tcæŋɡuaŋ「窓」、cæŋɡan「稀薄な」(及びその派生語)のような例外があるが、後述するように、gの直前でŋとnとの区別が極めて曖昧であるため、この場合はŋに後続する音がgでなくgであるということのほうが大切なかもしれない。

[ɤ]は前述のとおり3例しか見当たらないので出現する条件はよくわからない。

／e／の異音

普通は〔e〕が現れるが、gの直後では〔ɜ〕も現れる。第一音節では固有語にはge、漢語やチベット語からの借用語にはgɜが多いといえるかもしれない。ger「家」は見出し語では〔e〕であるが、mɔŋɡul gɜr「蒙古包」、xara gɜr「牢屋」、carda gɜr「倉庫」では〔ɜ〕が用いられている。一方dzæga ger「母屋」、dzauxa ger「集団の炊事場」では〔e〕が用いられている。こういった状況を見ると、〔e〕と〔ɜ〕は自由交替しているようにも見える。接辞-ŋgɜは-ŋgəと誤記されていることはあるけれども、-ŋgeと記されていることはない。語中、語末では〔ɜ〕のほうが多いようであるが、bergen「妻」、puger「蓋」、nengen「薄い」、gusge「鳩」のように〔e〕が用いられている語もある。語頭のkの後では〔ɜ〕が普通である。またnərɜ「名前」、nərɜ-「蒸留する」、nərɜ-「取りつける」、təŋgɜrɜ～tingərɜ「天」のようにrの直後のおそらく語幹末で〔ɜ〕が現れることがある。しかし一般的には〔e〕と〔ɜ〕の区別は音韻的にはできそうにない。

／i／の異音

先ず、〔i〕と〔ə〕について見てみよう。第一音節だけに限ると、dz, tɕ, ɕ, t, dの直後では〔i〕も〔ə〕も現れる。このうちdz, tɕ, ɕの直後の〔ə〕は語末にきているものに限られる。語頭のmi, piは漢語系語彙にのみ現れる。その他の場合は〔ə〕だけが現れる。語頭のt, d__については、ŋの直前では〔i〕が現れ、ŋ以外の子音の直前では〔ə〕が現れるという傾向がある。#tiC(≠ŋ)は1例しかなく、#təŋは4例しかない。4例のうち2例はi～ə、1例はə～aの自由交替形のうちの片方である。

語中では、urilga-「招く(使役)」、urildə-「招く(共同)」、baril「把手」、xaril「沙葱(植物名)」、xaril「答え」、xurintə「宴会出席者」のようにr__l, r__nの位置で稀に〔i〕が現れることがある。またdalimau「大礼帽」、miŋliŋ「命令」のように借用語ではlの直後に〔i〕が現れることがある。

dz, tɕ, ɕ, jの直後では、基本的には『土族語簡誌』と同様に、語末で〔i〕、語中で〔ə〕というようにほぼ相補分布しているものと、labdzə「葉」に対してlabdzəle-「葉が出る」のように常に〔ə〕になっているものとがある。語末で〔i〕が現れているbo:dzi「(助数詞)包」のような例外を除いて、語末で〔ə〕が現れるという点は『土族語簡誌』と同じであるが、語中では必ずしも〔i〕にはなっていない。『土族語詞彙』では、〔i〕と〔ə〕は同じ音素／i／の異音であるから、『土族語詞彙』に基づいていると思われる『土漢対照詞彙』及び『土漢語詞典』の表記では、ともにiとなる。

舌尖の摩擦音及び破擦音の直後に現れる／i／の異音

第一音節に限ると、歯音s, dzの直後には〔ə〕が現れるのが普通であり、〔i〕の例はそれ

それ1例ずつしかない。歯茎硬口蓋音 dz, tɕ, ɕ の直後では語末の場合に [ə]、それ以外では [i] が現れる。反り舌音 s, tʂ の後には [ə] も [ɪ] も現れる。反り舌音 dz の後には [ə] が現れる。

反り舌音 s, tʂ の場合のみどちらの母音が現れるかがはっきりしないが、該当する語はすべて借用語のようである。その中で、漢語からの借用語には興味深い関係が認められる。「升 (sheng)」> sən, 「石、拾、十 (shi)」> sl, 「成、承 (cheng)」> tʂəŋ ~ tʂən, 「持、吃 (chi)」> tʂl, 「政、蒸 (zheng)」> dzəŋ ~ dzən という関係である。dzl がないのはたまたま zhi という音節で始まる借用語が収録されていないためにすぎない。ともかく借用語ではあれ、こういった関係が認められる以上 [ə] と [ɪ] を同じ音素の異音だと主張するためには、例えば「反り舌音と鼻音に挟まれた /i/ は [ə] となり、それ以外の位置では反り舌音の後では /i/ は [ɪ] となる」とでも表現せざるをえなくなる。

歯茎硬口蓋音の後の [ə] はすでに述べたように語末に現れる異音である。したがって一般的には、歯音の後で [ə]、歯茎硬口蓋音の後で [i] というふうにはほぼ相補分布している。

/o/ の異音 [o], [u], [ɔ] (7)

/o/ の異音の現れ方を 9 つの場合に分けてみる。\$ は音節の境界を表す。

- A. __g, x, ŋ\$ の [ɔ] (規則的) 例多数
- B. __C (≠g, x, ŋ) の [ɔ] 4 例
aerɔ 「(愛惜を表す)」, nɔjɔ:n (=nəjɔ:n) 「官吏」, ɕɔrɔrɔ 「小溪の流れ」,
jo:xɔn 「まっ黒い」
- C. __g, x, ŋ\$ の [o, u, ɔ] 7 例
kurgolon 「凍えてかじかむ」, xudɔgtu 「(人名)」, sungunɔɕ 「葱」, tarɔɕ (=tarag)
「トラック」, donɔɕ 「事情」, tɕɔŋ 「鳳」, joɕor 「周囲」
- D. __\$g, x, ŋ の [o, u] 例多数
moɕui 「蛇」, xuɕur 「短い」等
- E. __\$g, x, ŋ の [ɔ] 1 例
nɔxuɪ 「犬」
- F. \$g, x__ の [u] (規則的) 例多数
- G. \$C (≠g, x, ŋ) __ の [u] 3 例
xudu 「大変」, xudɔgtu 「(人名)」, ɕurɕur (=ɕorɕur) 「ト」
- H. \$g, x__ の [o, u, ɔ] 6 例
korgo 「橋」, gur 「光」, loɕor 「(地名)」, sɔŋɕo 「筆」,
joɕor 「周囲」, jo:xɔn 「まっ黒い」
- I. \$C (≠g, x, ŋ) __ の [o] (規則的) 例多数

音節末の *g*, *x*, *ŋ* の直前 (A) では [ɔ]、一方音節初頭の *g*, *x* の直後 (F) では [u]、その他の位置 (I) では [o] が現れるというのが最も普通である。A と F の条件を同時に満たす場合は *xɔŋxu* 「紅」、*xɔŋgur* 「鈴」のように A に従う場合と、*boɣuŋgɜ* 「低い」のように F に従う場合とある。*xuɣur* 「短い」は D の条件に当てはまっているため、結局は F の場合と同じである。*x* の直後では *xunə* ~ *xɔnə* 「羊」、*xurə* ~ *xɔrə* 「指」のように *u* ~ *ɔ* のバリエーションを持つ語もある。

[u] は『土漢対照詞彙』では *o* と表記されている場合と *u* と表記されている場合とある。『土漢詞典』では *u* と表記されている。例えば、

『土族語詞彙』	『土漢対照詞彙』	『土漢詞典』	
<i>xuɣur</i>	<i>hughor</i>	<i>hughur</i>	短い
<i>ɣura:n</i>	<i>ghuran</i> (sic)	<i>ghuraan</i>	三
<i>ɣurɣur</i>	<i>xurghul</i>		ト
<i>ɣurɣur</i>	<i>xorghul</i>	<i>xorghul</i>	
<i>xɔŋxu</i>	<i>hongho</i>	<i>hong'hu</i>	紅
<i>xɔŋɣur</i>	<i>honghor</i>	<i>hongghur</i>	鈴
<i>ɣul</i>	<i>ghol</i>	<i>ghul</i>	溝

『土漢対照詞彙』の *ghuran* 「三」は *ghraan* の誤植であろう。H の『土族語詞彙』の表記も、『土漢対照詞彙』及び『土漢詞典』と付き合わせると、誤植のように思われる。

『土族語詞彙』	『土漢対照詞彙』	『土漢詞典』	
<i>korgo</i>	<i>korgo</i>	<i>kurgo</i>	橋
<i>ɣur</i>	<i>ghor</i>	<i>ghur</i>	光
<i>logor</i>	<i>loghor</i>	<i>loghur</i>	(地名)
<i>sɔŋgo</i>	<i>songgho</i>	<i>songghu</i>	筆
<i>jogor</i>	<i>yo/asgor</i>	<i>yusgor</i>	周囲
<i>jo:xɔn</i>	—	<i>yoohan</i>	まっ黒い

正しくは *korgo*, *ɣur*, *logur*, *sɔŋɣu*, *josgor*, *jo:xan* だと思われる。

／u／の異音

[y] は歯茎硬口蓋音の直後に現れる異音であり、その他の位置では [u] が現れるのが普通であるが、*tcu* も *tcy* も現れる。第1音節に限ると *tcu* は *g*, *g*, *r* の直前、*tcy* は *g*, *r*, *l*, *d*, *dz* の直前に現れる。後続の子音で部分的には弁別できそうであるが決定的ではない。開音節か閉音節かという点でも弁別できない。*dzu* も1例現れる。

さらに問題なのは、*dzu*: 「針」／*dzy*: 「相談」という最小対立があることである。しかも [y:] という長母音は編写説明には載っていない母音である。『土漢対照詞彙』では *juu* 「針」、

jiiyu「相談」と表記している。『土族語簡誌』(p. 6)には cu:ge-「許す」は [cy:kə-] と発音するという説明があるので、[y:] という長母音がないわけではないが、この語は『土族語詞彙』、『土漢対照詞彙』、『土漢詞典』には載っていない。

3. とくに問題になる子音と綴り字の関係

「土族文字法案」はラテン文字を用い漢語拼音法案に基づいて作られたものである。そのため 1 音 1 字の関係にはなっていない。拼音にもある zh, ch, sh, ng 以外に gh という文字連続が単独の音を表すために用いられている。これら文字連続を表す特別な名称は存在しない。他の文字の名称も魯長寿(1986:66)の土文字母表(草案)と李克郁(1988:9)の土文字母とで違っているものが 2 つある。r は前者は ar という名称を与えているのに、後者は er という名称を与えている。また v は前者では va、後者では vei となっている。

w 及び v

文字 v は何のために必要なのであろうか。『土漢対照詞彙』にも『土漢詞典』にもこの文字を使った語は現れない。『土族語詞彙』では [w] の代わりに [ʊ] が用いられている。『土族語簡誌』(p. 6)では [f] と [v] とがともに唇歯音となっているし、『土族語詞彙』の表記でも [ʊ] は唇歯音である。一方 Mostaert et de Smedt では [w] は両唇音となっている。この違いは方言差を表しているのか、それとも記述の精密さの違いを反映しているのかははっきりしない。実際の発音は両唇音か唇歯音かは別にして、唇の丸めの少ない音であるように思われる。

[ŋ] について

『土族語詞彙』では u:xan, u:xanɡ3「広い」(-ɡ3 は少しニュアンスの違った語を形成する接尾辞)、undurxa:n, undurxa:ng3「高い」のように [g] の前で [n] が [ŋ] になっている語と、ne:ten, ne:tenɡ3「湿った」、tco:n, tco:ng3「少ない」のように [n] のままの語とがある。また kongon「軽い」と cængan「稀薄な」のように語中にも [g] の前に [n] と [ŋ] の両方現れる。この 2 つのタイプの違いが何であるのか、全くははっきりしない。一方 nde:xon, nde:xonɡ3「ここ」、xalon, xalonɡ3「熱い」のように本来 [ŋ] のものは変化しない。『土漢対照詞彙』、『土漢詞典』では前者のタイプは n もしくは ng で表記されており、後者のタイプは ng で表記されている。後者のタイプには曖昧性はないが、前者のタイプは非常に曖昧である。すなわち『土漢対照詞彙』、『土漢詞典』の n は [n] を表している場合と [ŋ] を表している場合とがあり、いつどちらであるかは綴り字からはわからないということである。

『土族語詞彙』の編写説明 13 (3) (pp.11-12 及び p.18) には、[ŋ] の前に限って母音の鼻音化が起こることが記されているが⁽⁸⁾、kongon「軽い」と cængan「稀薄な」で第一音節の鼻

音化の程度に差異があるのであろうか。cæŋgan「稀薄な」は、前述のように、æの現れる環境の点でも特殊である。kəŋgərg3 (sic kəŋgərg3の誤植か) ~kəŋgərg3「太鼓」のようなバリエーションが記載されている語もある。

『土族語詞彙』ではtsuan「船」/tsuan「床」、dzuanla-「金を儲ける<賺」/dzuanla-「装う<装」のような[n]と[ŋ]の最小対立が語中でも語末でも存在する。これらは漢語起源の語彙であり、漢語の普通話における[n/ŋ]の違いを反映している。ところが、gundan「公平である<公道」、guntɕən「功労者<功臣」、gunzən「労働者<工人」などでは普通話の[ŋ]が[n]で表記されている。「公道」に対し「公的」はgondə、「工人」に対し「工作」はgundzo:と正しく[ŋ]で記されている。張成材(1980, 1984)によると青海省の漢語方言では普通話の[n/ŋ]の対立はなく鼻母音として実現するから、土族語が直接採用している漢語方言が青海省の方言⁽⁹⁾であることを考えると、この区別を中途半端に表記しようとしたもののようにも思われる。この点は後述の『土漢対照詞彙』でも同様である。しかし、『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』とでは[n]と[ŋ]との書き分けはきれいに対応しない。

土族語固有の語彙では、[g]の直前で[n]、[g]の直前で[ŋ]となるのが一般的な傾向のようであるが、mengu「銀」、fungu-「燃る」、cæŋgan「稀薄な」のように[g]の直前で[ŋ]が現れる語もある。

語中と違って語末の[ŋ]は比較的是っきりしている。モンゴル文語でŋで終わる語は、土族語(の互助方言)でも[ŋ]で終わる。チベット語からの借用語でもこの点ははっきりしている。一方モンゴル文語でnで終わる語の一部が土族語(の互助方言)では[ŋ]で終わる。urɔŋ「場所」、xalɔŋ「熱い」、barɔŋ「西」、de:ɔŋ「表面」、dzɔŋ「百」、ulon「雲」等がそうである。[ŋ]の前が[ɔ]であることが多いが、[ɔ]は/o/の異音であるから、kongon「軽い」、ulon(但し『土族語簡誌』ではulon)等との区別ができなければならないが、この点についてはよくわからない。ただgurdun「速い」、muro:n「川」、nojo:n~nəjo:n「官吏」のように[u], [o:], [ɔ:]の後では[n]である。

[ŋ]の表記が辞書によってくい違っている場合がある。この点について『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』を付き合わせてみることにする。『土漢詞典』は漢語系の借用語が十分には収録されていないので、検討できないことが多い。『土族語詞彙』の[ŋ], [n]は、『土漢対照詞彙』のng, nに対応するが、次のようにいくつかの場合がある。

	『土族語詞彙』	『土漢対照詞彙』	『土漢詞典』	漢語	意味
1.	ŋC(≠g)	= ngC(≠g)	ngC(≠g)		
漢	fanben	fangben	——	方便	方便
	ganbi:	gangbii	——	鋼筆	ペン
	dzæŋdzu:r	jangjuur	——	將就	我慢する

固	banɕir		bangxir	wangxir	長衣
	xanɕaː		hangsaa	hangsaa	パイプ
2.	ŋC(≠g) ≠	nC(≠g)	nC(≠g)		
漠	funɕia	funxaa	——	風箱	ふいご
	funɕseː	funchee	——	風車	風車
	gunlau	gunlau	——	功劳	功劳
	gunɕzoː	gunzoo	gunzoo	工作	仕事
固	menɕen	menhen	menhen		千
3.	ŋg	≠ ng	ng		
漠	dungoː	dungoo	dungoo	冬果	
	dungua	dungua	——	冬瓜	トウガラシ
固	funɕu-	funɕu-	funɕu-		擦る
固	menɕu	menɕu	menɕu		銀
3'.	ng	= ng	ng		
固	kongon	kongon	kungon		軽い
	nengen	nengen	ningen		薄い
		ningen			
4.	ŋg	= ngg			
漠	ɕaŋɕuŋ	chungɕun	——	長工	農家の常雇いの作男
5.	ŋg	= ngg	ngg		
固	donɕudə-	dongghudi-	dongghudi-		発生する
	xaraŋɕu	harangghu	harangghu		暗黒
	xonɕur	hongghor	hongghur		鈴
6.	ŋ#	= ng#	ng#		
漠	ɕsuaŋ	chong	——	床	床
	daŋ	dang	dang	党	党
	daːfaŋ	daafang	——	大方	気前がいい
チ	daŋaŋ	darang	darong, dirong		再び
固1	bulonɕ	bulong	bulong		角
	dəlaŋ	dilang	dilang, dilin		乳房
	dzoblonɕ	joblong	jublong		苦難
固2	baronɕ	barong	warong, barang		右
	deːxonɕ	deehong	deehong		表面
	xalonɕ	halong	halong		熱い

	xadɔŋ		hadong		hadong		硬い
	dzɔŋ		jong		jong		百
	urɔŋ		urong		uron, urong		場所
7.	#ŋg	≠	#ngh		#ngh		
固	ŋgua-		nghua-		nghua-		洗う
8.	n	=	n		n		
漢	gundan		gundang		gundang	公道	公平である
	guntɕən		gunchin		——	功臣	功労者
	gunzɕn		gunrin		——	工人	労働者

漢：漢語からの借用語 チ：チベット語からの借用語

固：固有語

固1：モンゴル文語でŋの語

固2：モンゴル文語でnの語

1と2の違いは後続の子音には求められないにも関わらず、『土漢対照詞彙』では区別されている。3と3'の違いがよくわからないということについてはすでに述べたとおりであるが、『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』とが偶然にも一致している。『土族語簡誌』では konggon, nəŋgon とどちらも [ŋ] で表記してあるので『土族語詞彙』の [n] は [ŋ] の誤植であろう。「場所」は [n] と [ŋ] の両方があるようであり、『土族語簡誌』では oron となっている。7については、#ŋx で始まる語がないために曖昧性はないようにみえるが、nghai-~anghai-「裂ける」のような語が『土漢対照詞彙』には載っているので、anghai-の綴り字からは [aŋgai-] ではなく [aŋxai-] と誤読される危険性もある。8は普通話では [n] であるにも関わらず、たまたま『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』とが一致して [n] になっている例である。

[ŋg] は実際には [ŋg] のはずであるから、『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』における表記の最も基本は固有語においては [N] を ng と綴り、[ŋ] を n と綴るといような解釈もできる。

音節末の [g] 及び [G]

『土漢対照詞彙』及び『土漢詞典』では母音の前の [g] は g、[G] は gh という書き分けがなされているが、音節末（語末及び子音の前）では g しか用いられていない。しかし、このことはすなわち、音節末では [g] しか現れないという意味ではない。資料によって多少の違いは認められるが、音節末では逆に [G] のほうが圧倒的に多い。以下音節末で [g] と [G] のどちらが表記されているか、各種の資料を検討してみよう。表記の煩雑さを避けるため次のように IPA の表記を用いて、DMF の軟口蓋音 g を [g]、口蓋垂音 ɣ を [G] に、Тодаева の軟口蓋音 r を [g]、口蓋垂音 ɣ を [G] に改める。

『土漢対照詞彙』	『土漢詞典』	DMF	Тодаева	『土族語簡誌』	『土族語詞彙』	
語末						
pujig	pujig	g	g	g	g	文字
udag	udig, idag	g	—	g	g	膝
qirag	qirig	g	g	g	G	兵士
budig	budog	g	g	G	G	染料
qijig	qijig	g~G	G	G	G	花
gurjag	gurjag	G	—	g	G	鋤
bulag	bulag	G	G	G	G	泉
pujag	pujag	G	G	G	G	豆
r/x/jog	r/x/j/yog	G	G	G	G	方向
子音の前						
nogdoo	nogshdoo	g	G	G	G	おもがい
tagsiraa-	tagsraa-	G	G	G	G	断つ
doglong	doghulong	G	G	G	G	びっこの

音節末では〔g〕のほうが圧倒的に多いことがこの表から一目瞭然であろう。『土族語簡誌』では「びっこの」は dogolon と〔g〕の次に〔o〕が付け加わっている。これは音節構造の解釈の面でも問題をもたらすことになるが、『土漢詞典』の綴り字はこの母音の存在を強調したものである。音節初頭では〔g〕と〔G〕は対立するため、この例は特別である。音節末の〔g〕と〔G〕の最小対立はなさそうであるから、ごく少数の〔g〕を犠牲にすることによって音節末の〔G〕を g と簡略表記することにしたというのが実態であろう。この簡略化によって語中での子音字連続がわずかに減少することにはなるが、hadongsga-「硬くする」のように語中の3子音連続が5子音字連続になることすらあるので、全体として子音字連続は依然として多い。

4. 『土漢対照詞彙』と『土漢詞典』の表記の違い

音素解釈の違いによるもの

『土族語詞彙』の〔ɣ〕が歯音 t, d の直後にある場合、『土漢対照詞彙』では i, 『土漢詞典』では u で表記してある。次に『土漢詞典』の表記だけを挙げる。moodu 「木材」、hamdu 「いっしょに」、tumur 「鉄」、baatur 「英雄」。歯音 t, d 以外の後ではこの逆の場合もあって ooki 「脂肪」の ki は『土漢対照詞彙』では u で表記されている。

『土漢詞典』では gh の直後に o でなく u が現れる。例えば、ghul 「溝」、ghur 「光」、

hughur「短い」、hongghur「鈴」、mongghul「モンゴル」、qidoghu「ナイフ」、shdoghu-「刺す」、ughu-「与える」。ghの直後にoiでなくuiが現れる。例えば、ghuisang「チベット」、ghuixji「乞食」、hughui「故事」、tolghui「頭」。hの直後でもoiでなくuiが現れる。例えばhuino「その後」、nohui「犬」。

『土漢詞典』には1語中に短いoを2つ持っている語は非常に少なく、多くは一方がuになっている。例えば、dundog「事情」、jublong「苦難」、yuro「声」。

『土漢詞典』でhuで始まる語の中で『土漢対照詞彙』ではhu~hoのバリエーションを持っている語がある。例えば、hui「回」、hulo「遠い」、huri「指」、huri-「集める」。また語頭子音がh以外の場合にもnuko「穴」、turong「初め」等は『土漢対照詞彙』ではu~oのバリエーションもある。

バリエーションの違いによるもの

『土族語詞彙』に記載されているバリエーションを『土漢対照詞彙』ではすべて記してあるのに『土漢詞典』ではそのうちの一方しか記していないことがある。『土漢対照詞彙』の表記で示すと、arasi~rasi「皮」、beeri~yeeri「妻」、bulai~bulii「子供」、buye~bee「身体」、diu~duu「弟」、ghadim~ghadin「姑の家」、idexi~dexi「食べ物」、lii~ii「(否定)」、molsi~malzi「氷」、muxgi~mushgi-「捻じる」、naiman~niiman「八」、niur~nuur「顔」、nudu~nudi「目」、nuri~nuru「背」、raawa~araawa「頭髮」、rlan~arlan「湿気」、sajaghai~sajighai「カササギ」、saar~szaar「根、台、麓」、shzin~szin「九」、tebjin~texjin「平らな」、ude~rde~de「人口」、ula~la「山」、ulong~long「雲」、ujuur~rjuur~juur「先」、wangxir~bangxir「長衣」、xoglo~xogla-「騒ぐ」、xoordo~xoorda「すぐに」等、『土漢詞典』ではいずれも最初の綴りしか記載されていない。この逆、つまり『土漢詞典』のほうが多くのバリエーションを記載している場合もある。例えば、fugu~hugu-「死ぬ」、funige~hunige「狐」、hghala~hgala-「捨てる」、joolondi~joolodi-「柔らかくする」、neezhang~niizhang「可愛そうな」、pagxi~bagxi「徒弟」、shbaawag~sbaawag「蛙」、szuri~suri-「水をかける」、tash~tar~dash「石」、xjun~fujun「娘」、yayi~yaara「炒麦」等は『土漢対照詞彙』ではいずれも最初の綴りしか記載されていない。『土族語詞彙』と『土漢対照詞彙』とはバリエーションの面で対応することが多く、以上の語の2つめ以下のバリエーションは『土族語詞彙』にも載っていない。

『土族語詞彙』に載っているバリエーションのうちの一方を『土漢対照詞彙』が選び、他方を『土漢詞典』が選んでいるために、結果的に両者の綴りが違っている場合がある。

『土族語詞彙』	『土漢対照詞彙』	『土漢詞典』
cilong	xilong	夜
cylong		xulong

[	dzob	job		正しい
	dzyb		jub	
[	avu	awu		兄
	abau	abau		
	a:bau		aabau	

『土族語詞彙』や『土漢対照詞彙』のバリエーションの記載とは無関係に、『土漢詞典』では無声子音のほうだけが採用されていることが多い。とくに i の前の s についてはこの特徴が顕著である。例えば、hoosin「乾いた」、qisi「血」、shdaasi「糸」、suneesi「魂」。

上で述べた規則的な対応以外の例（誤植の可能性はある）

[	idəg	idag	=	idag	膝
	udəg	udag		udig	
[	barɔŋ	barong		barang	右
	varɔŋ	warong	=	warong	
	omɔg	omog		omag	氏族

形態素の選び方の違いもある。例えば、『土漢対照詞彙』では「起こす」は posgho～bosgha～bosilgha-のように使役形の接辞として-gho～-gha～-lgha-の形式をすべて記載しているのに対して、『土漢詞典』は bosilgha～posilgha-のように-lgha-の形式しか記載していない。

5. 漢語系の語彙の表記

土族語には漢語からの借用語がたくさんあり、『土族語詞彙』や『土漢対照詞彙』には比較的多くのこういった語彙が収録されている。これらの中には青海方言から直接借用したと思われるものが数多く含まれている。張成材(1984)のデータによると、漢語の西寧方言と漢語の互助方言とはほとんど同じようであるので、土族語の借用語の形式をより詳しいデータのある西寧方言(張成材(1980))と比べてみることにする。

例えば、fan「双」、fudzi:「書記」、fuimi:「水泥」、caidau「街道」、gi:cæn「街巷」、nandzin「静かなく安静」等の第一音節の形式や fulun「富農」、pinlun「貧農」等の第二音節の形式は西寧方言の特徴を表している。普通話の sh [ʃ] の次に u があるとき、西寧方言では [f] が対応する。「双、書記、水泥」はその例である。また西寧方言の「街」は張成材(1980:291)によると、文語音は [tei 陰平] であり、白話音は [ke 陰平] であるから、白話音のほうを採り入れたのが「街道」の発音であり、文語音を採り入れたのが「街巷」の発音である。「安」の声母 n、「農」の声母 l も西寧方言の特徴と一致する。

西寧方言では韻母の n と ŋ の区別が中和し鼻母音に統合している。しかし普通話の an と ang

は西寧方言では〔ã〕と〔ɔ〕というように母音の区別がある。一方土族語の借用語では母音の区別はない。例えば、

普通話	西寧方言		『土漢詞典』	『土漢対照詞彙』	漢字	意味
ban	pã	上声	ban	ban	板	
fang	fɔ	陰平	fan(ben)	fang(ben)	方(便)	

普通話の ai, ao, iao は西寧方言ではɛ, ɔ, iɔ に対応する。土族語の借用語では普通話のほうに近い。

普通話	西寧方言		『土漢詞典』	『土漢対照詞彙』	漢字	意味
hao	xɔ	去声	xau	hau	号	
hai	xɛ	去声	xai	hai	害	
piau	piɔ	去声	piau	piau	票	

普通話の uang は西寧方言では uɔ に対応する。土族語の借用語では ɔŋ~uaŋ になる。

普通話	西寧方言		『土漢詞典』	『土漢対照詞彙』	漢字	意味
huang	xuɔ	陰平	xɔŋ(nen)	hong(nen)	荒(年)	凶作
zhuan	tɕuɔ	陰平	dzuaŋ (la-)	zhong(la-)	装	詰める
chuan	tɕ 'uɔ	陽平	tɕuaŋ	chong	床	
cf. chuan	t suã	陽平	tɕuan	chon	船	
lao	lɔ	上声	lau(xan)	lau(han)	老(漢)	夫

土族語の借用語における母音の発音は、「荒(年)」にわずかに西寧方言の特徴が認められる以外はなぜか普通話のほうに近いものが多い。第1節で述べたように b 類と e 類は土族語の内部においても長母音の方言と二重母音の方言とがあるため、「号」、「害」、「票」の発音は方言によっては漢語の西寧方言に近い発音をする地域もあるかもしれない。Schröder の資料では b 類は長母音で現れるが、「老(漢)」は lao(xän)(Xara Mori 143) のように下降二重母音で現れる。このことは、この語が借用されたのが、この方言の ao>ɔ の音韻変化以後であることを示唆するものである。

庄司(1987:1201)によると傅懋勳(1958)「再論国内少数民族語言中新詞述語的問題」『中国語文』6, 251-253) の p.253 に「ラテン文字を基礎とする文字の場合は、漢語の借用語の表記はできるだけ漢語の拼音に一致させなければならない。」と述べられている。土族語における漢語系借用語が拼音と必ずしも一致していないのは上に述べたとおりである。「船」は『土漢対照詞彙』では chon と綴られているが、『土漢詞典』では拼音と同様 chuan と綴られている。土族語の o は第7節で述べるように、多くの場合上昇二重母音であるから、どちらの綴りでも大差はないといえる。「店」は正書法で den と綴られる。e はやはり第7節で述べるとおり上昇二重

母音であるから、綴り字をことさらに dien とする必要はない。dian とすると、実際の発音から大きく逸脱してしまう。漢語の拼音に近づけると、正読法の面で土族語固有の語彙の場合と漢語系借用語の場合とに分けて説明をする必要が生じ、煩雑になる。例えば『土漢対照詞彙』に記載されている gogo「兄<哥哥」を漢語の拼音どおり gege と綴ると、「e は固有語では ie と読み、漢語系借用語では o～uo と読む」というような正読法上の説明が必要になってくる。これは土族語の音韻体系に著しく歪を与えることになって好ましくない。

6. 『土漢詞典』の序文等から読み取れる正書法の規則

『土漢詞典』には4ページわたって MUXIGU UGO (序文) があり、この表記を子細に検討することによって、付属語、付属形式、分かち書き、略字の書き方などがほんの一部ではあるが、わかる。

序文中に現れた語がすべて辞書に掲載されているわけではない。例えば HMNDX は中国語訳から「互助土族自治県」であることはわかるが、H 即ち「互助」の綴りは載っていない。M は Monghul であろうが後に属格の接辞 -nu を付けるのか付けないのかわからない。NDX は njeenaa daglagu xan「自治県」であることが njeenaa「自己」の項目をたまたま見ることでわかる。

綴りが違っている場合もある。例えば、序文の ladyin「ラテン」、gisnen「消息」、juure-「書く」、tasraa-「断つ」は辞書の見出し語では ladiin, gishnen, juuri-, tasiraa-である。これらは許容の範囲と考えるべきなのであろうか。そうであるなら、正書法は依然として確立しているとはいえない。

母音の脱落について

waraanu「取って」、ireenu「来て」は wari+aanu, ire+eenu の縮約であるから、「動詞語幹末の短母音は -aanu, -eenu のような長母音で始まる接尾辞の前で脱落する」という規則が必要である。warija「取った」は wari+ji+a であるから ji の母音が脱落している。

分かち書きについて

語幹に付けて書くもの 例 (とくに指示のないものは序文中にあるものである。

名詞及び名詞相当語句に付くもの 訳語は必ずしも文脈に則していない。)

数を表す接尾辞

単数 -nge

nenge「この」、sanalnaange「考えを」

-ge

debtirgenaa「本を」

複数 -ngula

rdemqingula「知識人」、dargangula「長老」

	-sge	tundaasge「同志」
格を表す接尾辞		
属格	-nu	gunsandangnu「共産党の」
対格	-nu	dardognu「歴史を」
	nii	pujignii ni「字を」、ugonii ni「語を」
与位格	-du	fongdu「年に」、pijigdu「文字に」、uyedu「ときに」
位格	-re	suul sarare「12月に」、merlongre「辞書に」
造格	-la	pujigla「文字で」
奪格	-sa	ndeexisa「これ以後」
共同格	-dii	mayagtii「～のような」
再帰格	-naa	pujignaa「文字を」
動詞語幹に付くもの		
語幹を形成するもの		
使役形	-lgha-	buraalghawa「終えた」
共同形	-ldu-	surildugu「学びあう」
形動詞		
未来	-gu	jublagu「研究する」、mbarlagu「印刷する」
	-gun	urolghagunsa「入らせる(奪格)」
継続	-jin	yaulghajin「行かせる」、surijin「学習している」
過去	-san	tagdirlasa「決定した」
副動詞		
非分離	-n	qijiglen「花が咲き」
	-n	kilenii「言う」、mudena「知っている」
結合	-ji	juuriji「書き」
	-j(<jj+a)	warija「取った」
分離	-aanu	waraanu「取って」
	-eenu	ireenu「来て」
仮定	-sa	iisa「～であるなら」
継続	-saar	waisaarwa「～である」
終止形		
未来	-m	shdam「できる」
現在	-ni	adani「できない」(ada-の項)
過去	-wa	ghariwa「出た」
意志	-ya	kurgeeya「捧げよう」

判断文末助詞

主観範疇	-ii		kilenii「言う」、ghuirilanii「要求する」
	-i		gui「ない」、yaugui「行く」(buの項)
客観範疇	-a	形容詞	saina「非常に良い」(ixiの項)
		動詞	mudena「知っている」、gua「ない」(guaの項)
	-na	名詞	kunna「人だ」(waの項)
		形容詞	ulonna「多い」(magの項)、ghurdinna「速い」(ixiの項)
		形動詞	tagdirlasanna「決定した」
	-wa	名詞	merlongwa「辞書である」、dundoggewa「ことである」、ghajarwa「所だ」(xambalongの項)
		形容詞	qadilongwa「満腹だ」(qadilongの項)、undurwa「高い」(niijeerの項)
		副動詞	waisaarwa「～てある」
助詞	-da		guledalda gui「議論もない」
接尾辞	-gu		guigu「ない」
合成語			aghaadiu「兄弟」、hunimaa「羊」(hunimaaの項)

離して書くもの

主題	ni		pujignii ni「字を」、deeren fondu ni「4年間に」
疑問助詞	uu		idaa nu?「疲れましたか」(nuの項)
	nuu		yauja nuu?「行きましたか」(nuuの項)
判断文末助詞	ii	形容詞	ixi qoon ii「非常に少ない」
		動詞	sgiji ii「待った」(dambangの項)
接続詞	da		mongghul ugo da qidar ugo「土族語と中国語」
合成語			turoo lisgaa「政策」、kun tiruudu「人民」
			qoon toodu szarbeten「少数民族」

大文字の使用法について

文頭	例省略
人名の最初	Likeyu「李克郁」
固有名最初	Dunda lus「中国」
	《Mongghul pujignu log mayag》『土族文字法案』
固有名各語の最初	《Dunda Lusnu Amii Qin》「中華人民共和国憲法」
	《Mongghul Qidar Merlong》『土漢詞典』
略号	HMNDX「互助土族自治县」

判断文末助詞のうちの客観範疇は前の語に付けて書かれるが、主観範疇のほうは動詞の場合は -n-ii は付けて書かれ、-ji ii は離して書かれる。形容詞の場合は離して書かれる。

xiranghul「河湟(地名)」は見出し語では分かち書きされていないのに、ghul の項目では xiran ghul と分かち書きしてある。

qida ndaala nigewa「君も私と同じだ」の da は助詞であり分かち書きをしない。同様に buda yaugunii「私も行く」の da も助詞であるが、この綴り字からは「我々は行く」の意味にもとれて曖昧である。

語音変化と正書法

土族語の正書法は「語音学原則」(話すように書く)という原則が優先されているが「形態学原則」(読み方を変えて書き方を変えない)という原則も重視されている。『土族語簡誌』の語音変化(pp.12-16)の記述と正書法との関係を吟味してみよう。

(一) 同化

『土族語簡誌』の記述		正書法	正書法上の例
1	否定辞 lii, lii, bii の後続母音からの同化	?	
2	dz, tc, c, j の後の ə が後続の子音の前で i に変わる	同一音素	labji 「葉」 labjila-「葉が出る」
3	sə + dz → cdz	一部適用する	naaxjin「妻を娶る肉親」
4	語末の n が後続の子音と同化し m, ŋ に変わる	分かち書き	sain mori「良馬」

(二) 異化

『土族語簡誌』の記述		正書法	正書法上の例
唇音 b, p, m, f, v の後にある語末の u が語中で ə[ɣ] に変わる		同一音素	nimpu-「吐く」 nimpusi「唾液」

(三) 脱落

『土族語簡誌』の記述			正書法	正書法上の例
1 母音脱落	(1)	動詞語幹末母音が長母音で始まる語尾の前で脱落する	適用する	wari-「取る」 waraanu「取って」
	(2)	s, l, r+ə で終わる動詞語幹の ə が子音で始まる語尾の前で脱落する	適用しない	suri-「学習する」 surijin「学生」
	(3)	結合副動詞 dzə の後に判断文末助詞 a, ii が付くと、ə が脱落する	適用する	warija「取った」
			分ち書き	sgiji ii「待った」
	(4)	終止形現在 nə の後に疑問助詞 uuが続くと、ə が脱落する	分ち書き	
2 子音脱落	(5)	終止形過去 va の後に疑問助詞 uuが続くと、a が脱落する	分ち書き	medewa uu?「わかりましたか」
	(1)	nで終わる数詞の後に -la が付くと n が脱落する	適用しない	ghraanla「三つとも」
	(2)	nで終わる数詞の後に sɔzən「九」が続くと n が脱落する ⁽¹⁰⁾	分ち書き	haran shzin「十九」

語音変化を綴り字で表すかどうかは分ち書きと深く関わっている。分ち書きをする場合、原則として語音変化は綴り字には反映されない。語音変化によって生じた音が同じ音素の異音であるという解釈が可能である場合も、やはり綴り字は変化しない。語形変化が綴り字上適用されない場合も綴り字は変化しない。結局 (一) 3 の一部及び (三) 1 (1)、(三) 1 (3) の一部の場合だけが綴り字にも変化が起こる。(一) 3 の一部というのは naadi-「遊ぶ」から派生した名詞 naaxjin「娶親人(妻を娶る肉親)」のような例のことである。

アポストロフィーの使用法

『土漢対照詞集』にはなく『土漢詞典』にあるものとしてアポストロフィーの使用がある。hong'hu「紅」、tus'haan「まっすぐ」のように使われている。hong'hu[xuŋxu]であって[xongu]や[xɔŋgu]でないことを表し、tus'haanは[tusxa:n]であって[tuɕa:n]でないことを表している。しかしアポストロフィーの使用は yanghoo「マッチ<洋火」、yanghui「セメント<洋灰」、yang'huu「洋混」のように一貫性がない。このため tanghui「万一」は[tangui]なのか[tanxui]なのか[tangui]なのかかわからないことになる。この語は「倘要(tangyao)」からの借用語であるので、[tanxui]であろうと想像するしかない。xiranghul「河湟(地名)」も[cirangul]か[cirangul]かわからないが、ghulの項目にxiran ghulと分ち

書きしてあるため [cirangul] であることがわかる。

n, ngに関する綴り字と発音の関係は次のようになる。

	[g]	[x]	[g]	[k]	#
[ŋ]	1 nggh	4 ngh	8 ngg	11 ngk	14 ng
		5 ng' h			
	2 ngh	6 nh	9 ng	12 nk	
[n]	3 ngh	7 nh	10 ng	13 nk	15 n

例

	綴り	発音	例	条件
1.	nggh	[ŋg]	hongghur 「鈴」	
2.	ngh	[ŋg]	nghua- 「洗う」、anghai- 「裂ける」	
3.	ngh	[ŋg]	xiranghul 「河湟（地名）」 (xiran ghul) 形態素境界	
4.	ngh	[ŋx]	yanghoo 「マッチ<洋火」	
5.	ng' h	[ŋx]	hong' hu 「紅」、yang' huu 「洋混」	
6.	nh	[ŋx]	menhen 「千」	
7.	nh	[nx]	ghuraanhaan 「たった3つ」	形態素境界
8.	ngg	[ŋg]	chunggun 「農家の常雇いの作男<長工」	
9.	ng	[ŋg]	mengu 「銀」	
10.	ng	[ŋg]	kongon 「軽い」	誤植の可能性あり
11.	ngk	[ŋk]	xonngkor 「護身符」	
12.	nk	[ŋk]	bunkang 「本杭」	
13.	nk	[nk]	banki- 「処理する<辯」	
14.	ng	[ŋ]	bulong 「角」、jong 「百」	語末
15.	n	[n]	sain 「良い」	
さらに、				
16.	sh	[s]	tuushang 「おさげを結ぶ細い紐<頭縄」	
17.	s' h	[sx]	tus' haan 「まっすぐ」	

ng' gh という綴りが存在しないのは曖昧性がないからである。[ŋg] という子音連続が『土漠対照詞彙』には見当たらないから、2 の場合は特殊なのかもしれない。分かち書きをすれば 2 と 3 は区別できる。4 と 5 は本来区別する必要はないのではなかろうか。k の前で ng ではなく n であるのが普通であるため、xonngkor 「護身符」という綴りは珍しいものであるが、曖昧性は

なく [cɔŋkor] 以外には読めない。こういった問題は [ŋ] を一貫して ng と綴ることによっておけば生じなかったはずである。ch に対する c'h とか zh に対する z'h は土族語には存在しないから、結局アポストロフィーの役割は16と17を区別することにしか役立っていない。

7. 正読法

口蓋化及び唇音化

『土族語簡誌』の子音の説明 (p. 7) の第2項に t, d, n, l の4子音は e, ee の前で口蓋化するという記述がある。『土族語詞彙』の編写説明13 (1) (pp.10-11 及び pp.17-18) にも e: の発音は [ie:] であり、e の発音は [ie], [iɛ], [iæ] であり前の音を口蓋化するという同じ趣旨の記述がある。『土族語詞彙』はさらに、o の発音として、少数の状況で典型的な [o] になる以外は [ʊə], [ʊɜ], [ʊa], [ʊo] であり、u は [ua] という色彩を帯びることもあるという唇音化の説明がある。例として de- [d'ie] ~ [d'æ] 「食べる」、korgo [kʊərgʊə] 「橋」が挙げられている。

『土族詞典』の凡例 (p.10) には、母音字母 e の読み方について e, ee は必ず ie, iee と読むという説明があるが、o については何の説明もない。Schröder (1980) には『土族語簡誌』の示す4子音以外にも r, m, b, d 等の口蓋化の例も見られる (角道 (1988b:33-34))。DMF やТодаеваでは口蓋化と唇音化を上昇二重母音として記してある語とそうでない語とがあり、両者の区別ははっきりしない。この実態については角道 (1987:57-58) ですでに述べた。Schröder (1959, 1970, 1980) に見られるこれらの現象及びバリエーションについては角道 (1988a, 1988b, 1990) を参照されたい。

第5節で述べたように、漢語系借用語は漢語の拼音には一致していないため土族語の固有語の正読法と同じものが適用できる。

語音変化

すでに述べたように正書法がすべての語音変化を反映していない以上、正しく発音するにはそれなりの注意を要する。第6節で述べたことのちょうど裏返しの現象が正読法の問題である。とくに問題になるのは発音されないものが正書法で表記される場合である。

例えば、suriŋin 「学習している」は [surədzin] ではなく [surdzin] と発音しなければならないし、ghariwa 「出た」は [garəwa] ではなく [garva] と発音される。また mudewa uu? 「わかりましたか」は [mudevau:] ではなく [mudevɔ:] となり、ghraanla 「三つとも」は [gura:nla] ではなく [gura:la] である。音節末の [g] と [ɣ] の違いはそれほど重要なことではないにしても綴り字には反映されていないので、正確に発音するためにはいちいち覚えておかなければならない。同様のことは ng の読み方についてもいえる。

8. おわりに

魯長寿 (1986:65) には1985年には青壮年層の文盲率を20%排除し、1990年には50%排除することを目指すという趣旨のことが書かれている。すでに1990年の下半期になっているが、この目標は達成されたのであろうか。土族語の文字を作る要求は1950年代初頭にあったにも関わらず一度挫折している。現在は幸い識字運動が順調に進行しているようである。『土漢詞典』の序文 (1984年5月の日付が入っている) には、多数の同志達が土族文字で大衆の中にある歌や故事や謎を文字に記録し始めていると書かれている。『土族民間故事』のような中国語訳のものはあっても、土族語自体を土族文字で記したものはまだ出版されていなかったから今後が期待される。

標準音が東溝音に決まったといっても、依然として地域差、世代差があるはずであり、バリエーションのどれを採用するかが大いに問題になるものと思われる。そして、文字が普及してからは綴り字発音という現象が起こってくるはずである。

註

- (1) 1979年6月、中共互助土族自治县委員会及び県人民政府は民衆の要求に基づいて慎重に研究し、土族文字を作ることを決定し、李克郁に土文法案を起草することを依頼した。土文法案 (草案) は7月16日、中共青海省委及び省人民政府に報告され、上級指導機関の討論を通過し、国家民族事務委員会に報告された。こうして土族人民の長年の願望が実現した。(魯長寿 (1986:58-59))
- (2) 互助と民和方言の齒莖硬口蓋音 (及びs) と反り舌音の対応は、照那斯図、李克郁 (1982) を参考にして図示すると、次のようになる。

	互助方言	民和方言	互助方言	民和方言	互助方言	民和方言
齒 音					s	s
齒莖硬口蓋音	dz	dz	tc	tc	c	c
反 舌 音	dʒ	dʒ	ts	ts	ʃ	ʃ

- (3) 『土族語簡誌』 (p.89) に載っている母音の中和の例を他の資料と比べてみると、次のように中和してしないことがわかる。

『土族語簡誌』	Тодаева	DMF	Schröder	『土族語簡誌』	
Xjir ghul	Halqi ghul	Narin ghul		民話方言	
ə	i, e	i, e	i, ɛ	i, u, ə, e	
tcə	çi	tʃi	tsi	tci	お前
xorə	xupi	xuri	xurɛ	quru	指
tanə-	tani	t'ani-	tani-	tani-	知る
kədə	kidin (sic)	k'idi	kidɛ	kedu	いくつ
tcaldə	čaldə	tʃi'ierdzə	——	tsarse	紙
tedze-	——	tʃi'idz'ie-	tidzie-	tedze-	養う

したがって東溝 (Xjir ghul) だけを互助方言の代表として採り上げて、民和方言と比べるのは適切でない。

- (4) Schröder (1964:144) には Xonitsi parj (chin, Yang-chüan (即ち yangjuan 「羊圈」)) と記されて

いる。この地名は「羊飼いの家畜小屋」という意味である。Schröder (1959:9) には同じ地名が ula-xonitsi-puñ と記されている。puñ は pañ (即ち paŋ) の誤植であろうか。mula-xonitsi-paŋ は mulaa huniqi pang 「小さい羊飼いの家畜小屋」という意味になる。

- (5) 『土族語簡誌』と同じ著者による照那斯図 (1987) では e, e:, a, a: がそれぞれ ε, ε:, a, a: となっている。
- (6) ɪ は i よりも低く、ə は ə よりも低く且つ後方であり、ɑ は a よりも前方、ɔ は o よりも高く ü は u よりも前方と記されている。ɪ は tɕ, tɕ', ɕ の直後に限られるようである。この点は『土族語簡誌』の記述と共通性がある。
- (7) Narin ghul 方言を記した DMF では ɣ に隣接するときに限って u でなく ʊ が現れる。これは F (及び A) と関連づけて検討する必要がある。
- (8) Hattori (1972:87-88) は DMF のデータを吟味し、鼻母音+ŋ を / 母音+ŋ /、口母音+ŋ を / 母音+n / と分析している。口母音+ŋ の ŋ は k, g, ɣ, x の前の / n / の異音ということになる。
鼻母音の数が文献によって異なっている。Mostaert et de Smedt (1929:159) 及び de Smedt et Mostaert (1964:6) では ä, a, o の 3 つの鼻母音、Schröder (1959:18, 1964:148) では a, e, o, ä の 4 つの鼻母音、『土族語簡誌』(p.4) では a, o の 2 つの鼻母音、『土族語詞彙』(pp.11-12 及び 18) ではとくに制限がない。
- (9) 張成材 (1984:196) では青海省漢語方言を西寧、樂都、循化の 3 つの下位方言に分けている。西寧方言には西寧、湟中、平安、湟源、互助、貴德、化隆、門源の地域が含まれ、陰平、陽平、上声、去声の 4 つの声調を有する。西寧と互助の違いは「庶、車、蛇、熱」の韻母が西寧では [ε] であるのに互助では [ei] であるという点、及び、互助県の賀尔川、北山などの公社では「基、欺、希」の韻母を、西寧の [i] とは違った [ɪ] で発音するという点である。西寧の調型は陰平 (44)、陽平 (24)、上声 (53)、去声 (213) であり、互助もほとんど同じである。
- (10) この現象は「n で終わる語の次に子音連続で始まる語が続くとき n が脱落することがある」というように一般化できるかもしれない。

Schröder (1980) のテキストには正書法で表すと sain shdag 「良い徴候」という意味のことばが、何度か現れるが、sain の n は常に脱落している。また 999 を表す数字は第 667 行では šdzën dzoŋ yäriñ šdzën と n が付いているのに、第 706 行では šdzën dzoŋ yäri šdzën と n がついていない。

しかし保安語も含めて観察すると事情が異なってくる。Čen nai siyang (陳乃雄) (1981:88) は hara jirsən 「十九」、xərə jirsən 「二十九」の例を挙げ、「九」の前で n が脱落するという記述をしている。保安語の「九」は語頭子音連続を持っていないので、上述の一般化は当てはまらなくなる。布和、劉照雄 (1982:35) にも har-iəsən 「十九」、xor-iəsən 「二十九」と n の脱落した形式を記載しているけれども、「九十九」は iəsaraq-iəsən と n の脱落していない形式になっている。

参考文献

- 布和、劉照雄 (1982) 『保安語簡誌』民族出版社
- 哈斯巴特爾等編 (1985) 『土族語詞彙』(Mongɣor kelen ü üges) 内蒙古人民出版社
- 互助土族自治県民族語文辯公室翻印 (1982) 『土漢対照語彙』(Monghol Qidar Harilqilegu Ugosge) 互助土族自治県
- 李克郁編 (1988) 『土漢詞典』(Mongghul Qidar Merlong) 青海人民出版社
- 魯長壽 (1986) 「大力試行土族文字提高文化水準」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』四川民族出版社 58-66
- 《土族簡史》編写組 (1982) 『土族簡史』青海人民出版社
- 席元麟 (1986) 「土族語音位系統」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』395-405
- 張成材 (1980) 「西寧方言記略」『方言』一九八〇年第四期 282-302

- 張成材 (1984) 「青海省漢語方言的分區」『方言』一九八四年三期 186-196
- 照那斯圖 (1981) 『土族語簡誌』民族出版社
- 照那斯圖 (1987) 「土族語」中央民族學院民族語言研究所編『中國少數民族語言』四川民族出版社 619-629
- 照那斯圖、李克郁 (1982) 「土族語民和方言概述」《民族語文》編輯部編『民族語文研究文集』青海民族出版社 458-487
- 服部四郎 (1959) 「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』第36号 40-54
- 角道正佳 (1987) 「土族語の下位方言」『大阪外国語大學學報』第75-1.2号 49-63
- 角道正佳 (1988a) 「Geser rëdzia-wu の言語 -自由交替-」『大阪外国語大學學報』第76-1.2号 25-50
- 角道正佳 (1988b) 「Geser rëdzia-wu の言語 -分布-」『大阪外国語大學學報』第77号 23-44
- 角道正佳 (1989a) 「モンゴル語 (土族語) の位格と与位格の用法について」『日本モンゴル学会紀要』No. 19 30-39
- 角道正佳 (1989b) 「土族語 (モンゴル語) における接尾辞-ngge について」『大阪外国語大學論集』第1号 1-27
- 角道正佳 (1990) 「土族語 (モンゴル語) の-方言の自由交替 -Aus die Volksdichtung der Monguor の言語-」『大阪外国語大學論集』第3号 65-91
- 斎藤純男 (1983) 「モンゴル語の音韻体系」『言語文化研究』創刊号 東京外国語大學大学院 外国語学研究科 言語・文化研究会 9-17
- 莊司博史 (1987) 「文学創製・改革にみた中国少数民族政策」『国立民族学博物館研究報告』12卷4号 1181-1214
- Čen nai siyang (1981) 'Bao an kelen ü "toṛa", ' Öbör mongṛol un yeke surṛayuli yin mongṛol kele bičig sudulqu ṛaṛar un kele bičig ün erdem sinṛilgen ü ügüel ün tegebüri, Dörbedüger debter, 87-102
- Hattori Shirō (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Developments - With Two Additional Remarks-' 『言語の科学』第3号 63-92
- Mostaert, A. et de Smedt, A. (1929-30) *Le dialecte mongour parlé par les mongols du Kansu occidental*, I^e partie, Phonétique, *Anthropos*, XXIV, 145-165, 801-815, XXIV. 657-669, 961-973.
- Róna-Tas, A. (1960) 'Remarks on the Phonology of the Monguor Language,' *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* X/3, 263-267.
- Róna-Tas, A. (1962) 'On Some Finals of the Monguor Language,' *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* XIV, 283-290.
- Róna-Tas, A. (1966) *Tibet-Mongolica, The Tibetan Loanwords of Monguor and the Development of the Archaic Tibetan Dialects*, Mouton & Co., The Hague
- Schröder, Dominik (1959) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1964) 'Der Dialekt der Monguor,' *Mongholistik*, Leiden/Köln E. J. Brill, 143-158.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 2. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1980) *Geser rëdzia-wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen) Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1933) *Le dialecte mongour parlé par les mongols du Kan souoccidental*, III^e partie, Dictionnaire mongour - français, Impimerie de l' université Catholique, Pei-p' ing.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1964) *Le dialecte mongour parlé par les mongols du Kansou occidental*, II^e partie, Grammaire, Mouton & Co., The Hague.

土 族 語 の 正 書 法

Тодаева, Б. Х. (1960) Монгольский языки и диалекты китая, Москва.

Тодаева, Б. Х. (1973) Монгорский язык, Издательство «наука» главная редакция восточной литература, Москва.

(1990. 9. 17 受理)

1990年9月25日に、孫竹、吳安其(1990)「從試行到推行的土族文字」の掲載されている『民族語文』一九九〇年第二期(1990年4月5日出版)が届いた。論文の締切後であったために、残念ながら参照、引用できなかった。